

移りゆく時代の中で ～2026（令和8）年～

社会福祉法人 県央福祉会
理事長 柴田 琢



情報社会といわれて

皆さんもよく耳にしませんか。「現代人の1日の情報量は、平安時代の一生分、江戸時代の一年分」というフレーズです。これは現代人の情報量の多さを皮肉ったものとしてとらえていますが、実際私たちの脳は絶えずフル回転している状況にあります。平均寿命は当然延びましたし、人間の脳も進化をしていることは間違いないかもしれませんが、平安時代と比べてもたかだか数倍ではないでしょうか。これに対し、情報量は何万倍にもなっていると言われています。朝の目覚めから、家事中も、通勤中も、勤務中も、育児中も、そして自宅でのゆっくりとくつろぐ時間さえも、多くの情報が手軽に扱える時代となっています。

自分で情報を選択、発信できる、知りたいこともタイムリーに調べることができ、質問をす

るとAIが答えてもくれる、そういう時代の中であって、世界中の紛争や天災、景気の動向なども、いとも簡単に検索できます。当然優れている部分も多く、情報の早さや共通性、そして遠くにいてもネット上で仲間をつくることもできます。

ただ、情報の速さや共通性は凄いことですが、それも諸刃の剣であり、扱い方次第ではないでしょうか。最終的に正しい情報かどうかの判断は私たち自身にかかっています。離れたところ、それが日本の裏側であっても共通の趣味や話題などを共有したり、仲間をつくれたりできます。

しかし、内閣府の発表では孤独死の増加も見て取れますし、ご近所さんとの関わりや対人のコミュニケーションなどは昔のほうが優れていたのかもしれませんが。

目次

- 1-2 寄稿 移りゆく時代の中で ～2026（令和8）年～
理事長 柴田 琢
- 3 寄稿 健康経営を通じて法人のブランド力を高める
常務理事 松本 孝治
- 4 寄稿 就労支援に強い法人を目指して 執行役員 鈴木 和人
- 5-7 特集① あおぞらアート開催報告

- 8-9 特集② お祭り紹介
海老名市立わかばケアセンター
- 10-11 特集② お祭り紹介
第13回感謝祭
- 12-13 インタビュー 輝く利用者さん
- 14 助成金受給・広報委員からのひとこと・編集後記

県央福祉会でも

とはいうものの、現代社会を生きるためにはSNSなどが必要であることもまた事実です。それがないと何かと仕事や私生活に支障をきたす場面もあります。県央福祉会でもSNSに関する色々なトラブルや職員からの声も受け、昨年ようやく本格的な「ソーシャルメディア・SNS利用管理規程」が完成しスタートしました。しかし、次から次に移り変わる時代に即した見直しも必要で、今後改訂しながら進めていく流れとなります。

また、長年作成してきた紙媒体をどうするのかも議論に上ります。歴史のある法人は特にそうだと思いますが、業務上多くの紙媒体が存在しています。広報誌に始まり、法人（事業所）パンフレットや商品パンフレット、社内報に採用パンフレットなど挙げればきりがありません。当然費用もかかりますし、本業以外の職員の業務負担にもなります。さらに外注していれば大きな経費となります。そして一番の課題は、その紙媒体をどれだけの人が見るのか、費用対効果がどうなのかということです。いっそのことネット上だけにして紙媒体を無くすか、無くさないまでも部数を減らすか、ページを減らす案もありました。しかし、ふと立ち止まったときに、「本当にそれでよいのだろうか」、「この時代だからこそ紙媒体も必要ではないか」との考えも浮かびました。それは、私が手書きの文章に対して愛着があることにもつながります。

デジタル文章が主流の時代であっても、綺麗な手書きの文章には、とても心が和み、書き手を尊敬出来ます。それがたとえ拙いものであっても、その人の個性が字には出ており、味になります。それはSNSが主流の時代であっても普遍的なものではないでしょうか。内容は同じでも、色々な字体変換機能があっても、時間をかける意味があると私は感じています。

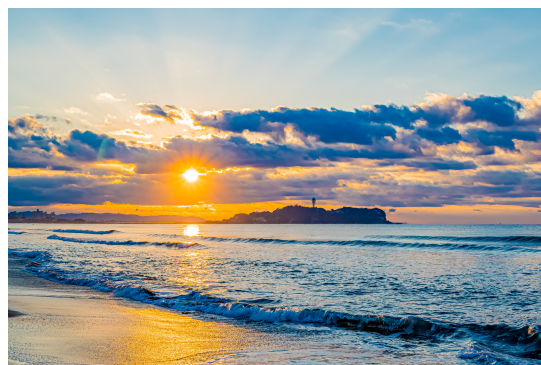
そのため、こんな私ですが、お礼状を書く際には、下手でも短い言葉でも必ず自分で手書きをします。受け取った側にも気持ちが伝われば尚嬉しいことです。

いろいろな経験

私自身昨年1年間だけで、詐欺メールに引っかかる、知らない間にプランを変更され他国で自分の回線が使用される、オンラインマーケットで買った品物が届かず返品されるなど、色々な経験をしました。さらに最近では、どんなにガードしても、事業所名や個人の名前をかたるスパムメール※など悪質なメールが横行しています。送信元のメールアドレスを確認する、メールの中に不自然な日本語や誤字がないか、リンク先のURLが怪しくないかを必ず確認する、添付ファイルは特に注意するなど、自分の身は自分で守る時代です。皆さまもお気を付けください。

いよいよ2026年度がスタートしました。私は昨年度の反省から、「確認の大切さと流れ作業の怖さ」を実感したため、改めて今年度の目標の一つに「確認の大切さと無意識の怖さ」を置きました。福祉の現場であっても、事務であっても、車の運転一つ取ってみても全ての事柄に通じる「確認と意識」を大切に、そして自覚して物事に取り組んでいきます。皆さまも新年度に、是非何か一つ目標を立ててみてはいかがでしょうか。

※スパムメール：受信者の意向を無視して無差別かつ大量に送られる迷惑な電子メールを指します。



2026年1月1日
初日の出（江
の島を望む）

健康経営を通じて法人のブランド力を高める

社会福祉法人 県央福祉会
常務理事 松本 孝治



昨今、働き方改革や労働人口の減少、それに伴う人手不足など、社会を取りまく環境の変化の中で、法人が持続的に成長をしていくためには、仕事に従事するもの一人ひとりが健康でいきいきと働ける環境を整備することは不可欠となります。

社会福祉法人県央福祉会では「明るく、楽しく、元気に」をモットーに掲げ、職員、家族が健やかで、活気のある生活を営むことができる環境を整えるために、事業計画の中の重点目標に「健康経営」を掲げています。その中で、従事者一人ひとりが心身ともに健康で自分力を発揮することを目的に、法人として整備していくことを宣言しています。「健康経営優良法人※」を目指していくことを一つの指標として、働く人の健康意識の向上、法人のイメージアップ、インセンティブの創出、SDGsへの貢献へつないでいきます。

具体的には、時間外・休日労働の削減、年次有給休暇の取得促進によるワークライフバランスの推進、定期健康診断の完全実施や生活習慣病リスクの分析・改善、厚労省「労働者の心の健康の保持増進のための指針」に基づくメンタルヘルス対策、腰痛対策など、さまざまな健康課題への対応を行います。法人衛生委員会、職員会議などを通じて、職場環境の改善や健康に関する課題を検討し、これらの取組により、働きやすい職場環境、従事者の離職率低下の実現につなげていきます。

「健康経営」によって、働く一人ひとりの健康が促進され、定期的な健康診断や保健指導、禁煙サポートなどにより、生活習慣病のリスク低

減やメンタル不調の改善などが期待されます。みんなが健康になることで意欲が高まり、仕事へのモチベーションが生まれます。集中力や創造性が向上し、仕事の遂行力も高まり、それが法人の活力へとつながります。

さらに、従事者が健康であれば、医療機関にかかる回数が減り、医療費負担が軽減されます。そして、健康問題による休職や離職が減ることで、新たな人材の採用や教育にかかるコストも削減することができます。加えて、労働安全衛生に対する意識が高まることにより、労働災害のリスクが低減されることも期待できます。

短期的になせることもあれば、長期的視点が必要なものまでさまざまですが、どの取り組みも着実に健康な経営へと成長ができるものです。県央福祉会では、「健康経営」に従事者一人ひとりの健康を守り、法人の持続的な成長を実現できる見逃すことができない重要な戦略と位置付け、今後の多様な社会、働き方の課題に対応するための基盤にします。「健康経営」を通じて、法人のブランド力を高めることにより、優秀な人材確保や定着につなげてまいります。

利用される方々、ご家族とともに、「明るく、楽しく、元気に」穏やかに過ごせる日々の中で、良い仕事を続けてくには、健康な毎日を過ごすことが何よりも大切です。

※健康経営優良法人：特に優良な健康経営を実践している大企業や中小企業等の法人を「見える化」することで、従業員や求職者、関係企業や金融機関などから社会的な評価を受けることができる環境を整備することを目的に、日本健康会議が認定する顕彰制度（経済産業省ホームページより）

就労支援に強い法人を目指して

社会福祉法人 県央福祉会
執行役員（就労支援担当） 鈴木 和人



気づきを共有し合う就労部会

就労部会の活動に関わる中で、私がいつも感じているのは、「働くことには、人を前向きにする力がある」ということです。働く場があることで生活にリズムが生まれ、役割が生まれ、誰かに必要とされる実感があります。そして、その力を支えているのは、日々現場で利用者さんと向き合い、一緒に悩み、一緒に喜びながら支援を続けている職員の皆さんです。

こうした現場の支援をより良いものにするため、就労部会では定期的に会議を開き、各事業所の取り組みや現在の状況を共有しています。会議の中では、「こんな工夫をしたらうまくいった」「ここが難しくて悩んでいる」といった率直な声がたくさん出てきます。それが、他の事業所にとって新しい気づきとなり、支援の改善につながる大切なヒントになっています。私は、こうした気づきが単なる情報交換にとどまらず、職員一人ひとりが前向きに業務へ取り組みきっかけになってほしいと願っています。

今、こうした“気づき”はこれまで以上に重要になっています。特にここ数年は、社会の変化が大きく、働き方も支援の方法も見直しが必要な場面が多くありました。コロナ禍をはじめ、働き方改革、地域の産業構造の変化など、就労支援を取り巻く環境は大きく揺れ動きました。さらに、物価高騰の影響は福祉事業にも及び、限られた資源の中で事業運営の見直しや効率化を迫られる場面も増えています。こうした状況の中で、どうすれば利用者さんの働く機会を守り続けられるのか、各事業所が真剣に向き合い、工夫を重ねてきました。

新しい働き方への対応

その工夫の一つが、働き方の変化に合わせた新しい支援方法の模索です。オンラインによる企業との連携が広がり、企業説明や面談をリモートで行うケースも増えました。また、在宅就労のニーズが高まり、作業の切り出し方や支援の仕組みを再構築する必要も出てきました。どの取り組みも簡単ではありませんでしたが、支援者の柔軟さと粘り強さが、利用者さんの挑戦を支え続けてきたのだと思います。

利用者さんの希望する働き方も多様化しています。福祉サービスを使って働く福祉的就労や、一般企業で働く企業就労など、利用者さんの希望する多様な働き方を支えたい。どの道を選んでも安心して働き続けられるようにすることが、これからの法人に求められる役割だと感じています。

支援者同士がつながり、学び合い、安心して働ける環境をつくることは、利用者さんの挑戦を支える大きな力になります。支援者が安心して働けるからこそ、利用者さんの思いに丁寧に寄り添うことができます。だからこそ、就労部会は“支援者の居場所”であり続ける必要があると感じています。

これからも、利用者さんの働く力を信じ、支援者同士が支え合える場づくりを続けていきたいと思っています。そして、福祉的就労も企業就労も含め、利用者さん一人ひとりの希望する働き方を支えられるよう、現場・利用者さん・経営の三つの視点を大切にしながら、県央福祉会を“就労支援に強い法人”へとさらに育てていきたいと考えています。

特集①あおぞらアート開催報告 青空の下、つながりが生まれた一日

障がいの有無、年齢を超えて、誰もが筆を持つ。その瞬間に生まれる一体感が、地域を変えていく

○やまゆり園事件から10年——相模原でこそ、この活動に意味がある

2016年7月26日、相模原市の津久井やまゆり園で、障がいのある19人の命が奪われました。あの事件から10年が経ちます。「障がい者は不要だ」という凶刃は、私たちの地域に深い傷を残しました。しかし私たちは問い続けてきました——「偏見や無関心は、どこから生まれるのか」と。

あの事件が問いかけることに、簡単な答えはありません。ただ、小さなころから日常的に一緒に過ごし、笑い、表現し合う場があること——多様な人と出会う経験を積み重ねること——が、共生社会への第一歩ではないかと、私たちは考えています。施設の利用者さんを「よくわからない人」として遠ざけてしまうのではなく、顔と名前を知り、同じ空の下でキャンバスに向かう。「あおぞらアート」は、そのような小さな日常の接点をつくることから始まる、共生社会への実践です。



あおぞらアートのぼり

○地域に「知ってもらおう」活動の一つとして

未来わかまつ（ミラクルわかまつ）は、開所10年目を迎えた当時、近隣にとって「何の施設かわからない」閉鎖的な存在でした。地域との接点を増やすため、日常的な清掃活動、にじいろマルシェなど、段階的に「知ってもらおう」活動を展開してきました。その積み重ねの一つとして、あおぞらアートに参加することになりました。

きっかけは、グループホームの地域連携推進会議でフェースオブワンダーの金子光史氏と出会ったこと。40年にわたり障がいのある人々とアートに向き合ってきた金子氏の言葉が、このプロジェクトの核心となりました。



準備中

「アートには失敗がない。そして、人と人をつなぐ最も簡単な力を持っている」

○「みんなちがって みんないい」 イベントの理念

本イベントは、「障がいがあるなしという形で、最初から見えない壁を作るのはよくない。誰もが表現できる」という理念のもと企画されました。やまゆり園事件を経験した相模原だからこそ、この考え方は深い意味を持ちます。

アートを通じて表現される思いや感情は、言葉ではなかなか伝えることが難しいものですが、絵や色彩を通して共有することで、年齢や障がいの有無を超えた新たなコミュニケーションの機会が生まれます。

○2025年度開催概要

日程・会場：

- ・10月10日（未来わかまつ）
- ・10月19日（星が丘フェスティバル）
- ・10月25日（松が丘園祭）
- ・11月7日（相模病院）

参加対象：障がい者・保育園児・地域住民・すべての年齢層

参加費：無料（当日参加自由）

活動内容：共同キャンバスにみんなで絵を描く、自由創作アート、作品展示・鑑賞運営：

- ・主催：相模原市障害者地域作業所等連絡協議会
- ・共催：社会福祉法人県央福祉会 未来わかまつ、オハナホーム地域連携推進会議
- ・協力：相模病院、わかまつこども園、星が丘地区フェスティバル実行委員
- ・アドバイザー：金子光史（Face of Wonder 主宰）



使用した絵の具

○当日の様子——青空の下で生まれたもの

青空の下、大きな白い紙（梱包用ペーパークロス30m）の上で、障がいのある人も、近所の子どもたちも、お年寄りの方も、一緒に筆を動かしました。音楽の生演奏が流れ、笑い声が響き、誰も「上手い」「下手」を気にすることなく、ただ表現する喜びを共有していました。キッチンカーも出店し、作品は缶バッジにして記念品にするなど、工夫を凝らした運営が行われました。

○参加者の声

- ・「うちの子、こんなに集中して絵を描くの初めて見ました」
- ・「利用者さんたちの笑顔が本当に素敵ですね」
- ・「また来年もやってほしい」

利用者さんが思い思いに筆を動かす姿、地域の子どもたちが無邪気に色を重ねる様子、世代を超えて同じキャンバスに向かう一体感。「できる」という自信に満ちた表情と、自然な会話と笑顔の交流が生まれました。



思いのままに描く保育園児

○子どもたちへの思い——10年後、20年後への投資

今一緒に絵を描いた子どもたちが、10年後、20年後、この地域で暮らす大人になります。その時、彼らは「障がいのある人と自然に関われる大人」になっている。これは地域の文化を変える長期戦略です。

金子氏は語ります。「それぞれの地域が小さな単位で活動を耕していくことが重要。各地で小さなあおぞらアートが開かれ、有機的につながっていく。そうやって、相模原全体に共に生きる文化の土壌ができていくのです」

○つながりが命を守った実例

2025年5月、利用者さんが裸足のまま施設から走り去る出来事が発生しました。しかし、裸足で走る人を見て通報してくれた近隣住民、コンビニで保護してくれた店員、状況を理解してくれた警察—日頃から「あの施設の利用者さん」という認識が地域にあったから、命が守られました。



真剣に色塗りをしています

○物理的な鍵ではなく、関係性で命を守る

セーフティーネットは日常から構築する。緊急時に助けを求めても、日頃の関係性がなければ動いてくれません。平時からの「顔の見える関係」が命を救います。「奇異な目」が「あたたかいまなざし」に変わること、共生社会が実現する—これが、私たちがたどり着いた答えです。

○数字が示す変化、数字では測れない変化

未来わかまつでは、地域との接点を増やす取り組みを続けた結果、平均工賃が3.5倍、年間売上が3倍以上になりました。しかし、一番変わったのは数字ではありません。地域の方々からの声掛けが増え、職員の誇りになり、サービスの質の向上や働きがいにつながっています。アートは言葉を超えてつながりました。

○今後の展開——継続こそが、セーフティーネットを強くする

人は入れ替わり、記憶は薄れます。だから、継続的にイベントを開催し、新しい住民と出会い、関係を更新し続けます。それが、セーフティーネットを強くする方法です。



演奏を楽しむ保育園児



利用者さんと一緒に楽しんでいます



晴天の下楽しんでいる風景

○2026年度の予定

- ・花博への参加——より多くの市民とキャンバスをつなぐ
- ・星が丘フェスティバル・松が丘園祭など地域イベントへの継続参加
- ・昨年度参加4会場での継続開催（未来わかまつ・星が丘・松が丘園・相模病院）
- ・新たな地域との連携拡大——あおぞらアートの輪を相模原全体へ

秋空の下で描かれた共同キャンバス。色とりどりの線は、人と人のつながりの象徴です。この絵が完成することはありません。毎年、新しい色が加えられ、新しいつながりが生まれ、セーフティーネットは編み続けられていきます。

「あおぞらアート」は、相模原市における新しい文化の創造と、アートを通じた心豊かな地域社会の実現を目指しています。

私たちが目指す未来

利用者さん一人ひとりに、地域の方々が声をかけてくださる関係。「〇〇さんおはよう、今日も頑張っているね」——これが私たちの夢です。

文：未来わかまつ 金井



太い筆で集中して描きます



全身を使って楽しむ保育園児

未来わかまつ
事業所データ
住所：〒252-0334
相模原市南区若松1-1-42
TEL：042-705-8241
FAX：042-765-1003



特集② お祭り紹介



海老名市立わかばケアセンターへの感謝のおまつり ～5日間連続の企画とは～

『わかばまつり』は新型コロナウイルス感染症の流行のため5年間行うことがなく、2025年11月に本当に久しぶりの開催となりました。5年間という職員の入替わりもあり、知っている職員は半分以下となります。利用者への満足度調査では、『わかばまつり』を企画してほしいという声が上がっていました。この道40年超、就職してから毎年のようにお祭りをやってきましたが（決してお祭り男ではありません）、所変わればもちろんやり方も変わります。

さて、どうしたものかと思っていたところに、2024年12月の年末に「お楽しみ給食」と「マジックショー」という企画がありました。わかばケアセンターの利用者は毎日通所している方以外に週に1～3日通所されている方も多いため、1日だけのイベントだと全員が楽しめないと気付かされました。今までは土日に集中してお祭りは行っており、一種の日程に関する固定観念を覆されたことで、『わかばまつり』連続5日間実施構想へつながりました。

『わかばまつり』再開を実施するための目的は、

- ①わかばケアセンターは2026年度後半で社家方面へ新築移転予定で、現地で行う最後のおまつりになるため、現わかばセンターへの感謝の気持ちを込めて行うこと
- ②会館内事業所の事業や日課を変えずにおまつりに参加してもらうことを基本とし、そのためには、
 - ㊦月～金の午後の時間帯（13:00～16:00）を使うこと
 - ㊦飲食物販売は軽食とすること
 - ㊦準備はわかば会館職員を中心に行うこと
 - ㊦ステージイベントは2部制、販売は開催時間内とすること



『ぽっぷこーん』による演奏会



『立川ういん』による落語

とし、8か月前から余裕をもって少しずつ準備を進めてきました。㊦のステージイベントは5日間×2部制＝10枠あるので、法人内外の今までのつながりから依頼させていただきました。運よく地元のミュージシャンで海老名駅路上ライブを行っている『ぽっぷこーん』が出演、職員の紹介で立川しらく師匠門下の『立川ういん』の落語と平時ではなかなか体験できない企画をすることができました。

『わかばまつり』の1週間前に開催された法人後援会コンサートにも『ぽっぷこーん』は出演しています。さらに地元では、海老名支援学校の生徒さんの音楽バンドと市社協ボランティアセンター紹介のマジックとけん玉と紙切りのパフォーマンスもお祭りを盛り上げていただきました。また、自主製品等の販売では地元海老名市と当法人の施設1日4団体計18団体、展示ではわかばケアセンター家族有志と利用者の作品、海老名市中新田かかし祭りの最優秀作品等、そして市公認ゆるキャラ『えび～にゃ』が花を添えていただきました。早くから準備をしていたのでバザー品も集まり、売上の21,370円は全額赤い羽根共同募金へ寄付させていただきました。2024年1月1日の能登半島地震を忘れないためにも被災地支援としてグッズ販売も行っています。今振り返るといろんなことを思いついたので多種多様な企画を盛り込んでいたと感じます。すべての団体は書ききれませんので次ページの「わかばまつりスケジュール表」をご覧ください。

わ か ば ま つ り ス ケ ジ ュ ー ル						
11月		17日（月）	18日（火）	19日（水）	20日（木）	21日（金）
1階カウンター			コーヒー販売 「ふきのとう舎」			レーザークラフト
1階ホール		「海老名支援学校」と「地域活動センター結夢」のかかし展示・住友生命健康測定会				
1階交流室	13:30	音楽バンド「(社福)進和学園 とびっきりレインボウズ」	ピアノコンサート 「わかば学園江口職員」	地元ミュージシャンコンサート 「ぼっぷこーん」	音楽バンド「海老名支援学校 EBISAS6 (エビ・サス・シックス)」	県央福祉会 トランスミュージック
	14:30	マジック 「我楽多一座」	けん玉 「けん玉道 田上氏」	落語 「立川ういん」	紙きり 「よしまろさん」	ピエロパフォーマンス 「シャルル」
13:00～16:00						
2階第2会議室	販売・展示	クレイヨンピーピー	希望の家	はあとすまいる（パン）	ワークショップ菜の花	りんく風の風（焼菓子）
		モンド湘南藤沢	福祉創造スクエア・すぷら	かたくりの里	ピッコリーナ	星谷会・レインボードリーム
		星谷会・あきば	パステルファームワーク	星谷会・かっぱ堂	星谷会・結夢	家族有志・鉄道模型
				ふきのとう向生舎	グランツ遠藤	関山グループ（手芸品）
		家族会有志展示「己書」・わかばケアセンター利用者作品展示				
		わかば会館バザー【無くなり次第終了】				
全館			ゆるキャラ「えび〜にゃ」			
駐車場	キッチンカー・屋台	焼餃子「ふじさわ爽風舎」	揚げパン「星谷学園」			韓国料理「HAPPY YELLOW」
		ピザ他「Kitchen Oto」				ピザ他「Kitchen Oto」
		ソフトクリーム他「café ガーデン」				
		クレープ・わたあめ他「Garden Kitchen」				
		ベビーカステラ・チュロス「たぬきcafé329」				

海老名市内関係者・団体

今回の『わかばまつり』はわかば会館全館ではなく、4分の1程度の区画を使ったのでこじんまりした雰囲気だったかもしれません。チラシやポスターの配布や、1か月前からは会館内の装飾で、会館を利用される大人や子ども、周辺の公共施設、関係団体の目に留まるようにしました。参加した方が面白かった、楽しかった、〇〇がおいしかったなどと感じただけなら幸いです。当日の様子やいただいたサイン等はわかば会館の1階ホールにパネルにしてありますので、ご来館の際はぜひご覧ください。

私自身も5日間連続おまつりは初めてで、販売の方は今までの施設のお祭り経験上時間をかければ何とかなる（悪い癖ですね）とは思っていましたが、ステージイベントの方は10枠なので、一つ決まると「ホッと」の連続でした。また、飲食については海老名市の後援や保健所の助言もあって時間がかかりましたが、主催者としてルールを守って行うことができました。5日間連続ができたのはわかば会館という建物環境や34年間この地に根付いているつながり、久々にお祭りやってみようという皆様の前向きな姿勢が実現にこぎつけたと思います。どこの施設でもこのようにできるというわけではありません。ちょうど良い条件がかみ合ったのだと思います。あと、初日に体力を使い果たすと最後まで持ちませんのでご注意ください。

今後についてはまだ未定ですが、もしも新天地で仕事をさせていただけるのなら、地域や関係団体の皆様との顔の見える関係づくりを構築していく方法として身の丈に合ったところからかなと思います。

最後になりますが、わかば会館駐車場にキッチンカーや施設の屋台が毎日あってお祭りを盛り上げていただきました。そのキッチンカーに昨年末自宅近くのショッピングセンターで偶然お会いしご挨拶をしました。一つの出来事からいろんな人とのつながりが生まれ、それがこれからも広がっていくことを期待したいと思っています。

文：常務理事／海老名市立わかば会館 近藤

特集②お祭り紹介

第13回 感謝祭を開催

○県央福祉会の理念と地域との関わり

県央福祉会は、「地域と共に」を基本理念に掲げ、利用者の皆さまが住み慣れた地域で安心して生活できるよう、地域との関係性を重視した事業運営を行っています。各事業所では、日常的な支援活動に加え、地域行事への参加や交流を通じ、地域住民との相互理解を深める取り組みを継続しています。

近年の障がい福祉の環境では、利用者さんの生活を施設内だけで完結させるのではなく、地域社会の一員として捉え、総合的に支援する視点がますます求められています。そのため、地域住民の理解や協力、顔の見える関係づくりは欠かせません。事業所や職員一人ひとりが、地域の中でどのような役割を果たしているかを再認識することが重要です。



中学校の吹奏楽部の演奏

○感謝祭の目的と意義



ウォークラリーの商品交換所

本感謝祭は、地域の皆さまに日頃の感謝を伝えるとともに、誰もが気軽に参加し楽しめる機会を提供することを目的としています。各事業所が地域に根差した身近な存在であることを改めて知っていただく場であると考えています。職員にとっても地域との関わりを振り返り、自らの支援が地域の中でどのように位置づけられているかを考える貴重な機会です。

また、ふきのとう舎・向生舎・療育センター・ゆりの木ホーム・カーサ柳橋が共同で取り組むことで、事業所間の連携や相互理解を深め、協調・協力体制の強化につなげることも目的としています。

○感謝祭を通じて期待される効果

感謝祭を通じて得られる効果は、地域・職員・法人の三つの視点で整理できます。

1. 地域に対する効果

- ・ 事業所の活動内容や役割への理解が深まり、障害福祉への関心や理解が促進される
- ・ 事業所が地域に根差した身近な存在として認識され、協力関係の構築が期待される
- ・ 利用者さんと職員との交流を通じて相互理解が進み、安心して共に暮らせる地域づくりに寄与できる

2. 職員に対する効果

- ・ 地域との関わりを振り返る機会となり、自身の支援の役割への理解が深まる
- ・ 他事業所の職員との協働を通じ、支援の幅や質の向上が期待される
- ・ 行事の企画・運営を通じ、主体性や協働意識が高まり、日常業務への意欲向上につながる

3. 法人に対する効果

- ・ 法人全体として地域との関係性を再確認し、地域に開かれた事業運営の推進につながる
- ・ 事業所間の連携強化により、一体感の醸成と安定した事業運営基盤の構築が期待される
- ・ 地域との信頼関係を継続的に築くことで、今後の事業展開や地域連携の深化に資する



向生舎の自主製品の販売

○ふきのとう向生舎の取り組み

ふきのとう向生舎は、重度の知的障害のある利用者さんが多く通う施設です。私たちは、利用者さんが地域の中でどのように過ごすことが幸せなのかを日々考えています。そのためには、事業所の枠だけでなく、地域や関係機関、フォーマルな支援から日常の小さな関わりまで、幅広く見つめることが大切です。

感謝祭は、このような視点を持ち続けるための貴重な行事です。地域の方々や関係機関の皆さまと直接ふれあい、利用者さんや地域、社会に対して私たちがどのように関われるかを身近に感じることができます。得られた気づきや学びは、日常の支援や地域との関係づくりに生かされ、より良い生活環境の実現につながります。



ゲームコーナーのストラックアウト



ヤマトンも遊びに来ました

○今後の取り組み

- ・当事者活動の推進として、「はばたき会びっくり箱」の活動に参加していきます。「はばたき会」は県央東地区の知的障がい者施設の利用者さん同士が交流し、意見交換しながら企画、イベントを行う当事者活動です。昨年度は「あおぞら意見交換会」にも参加し、zoomで他の施設の利用者さんと意見交換をされています。そのような活動の中で、自分の施設だけではなく、他の施設に行き、色々な人との出会いや色々なことを経験する場面を設けていきます。

- ・利用者さんの可能性を探りながら、地域での活動に参加していきます。農家さんのご協力もいただき、農福連携としてできる範囲で進めていければと検討しております。まずは、自治会の防災訓練の参加、大和市民祭りや県央東地区合同でのフェスタへの参加等も予定しており、そのような地域との関わりを大事にする中で利用者さんの世界が広がっていくことを目指しています。

今後も、利用者さんにとってより良い生活環境を考えながら、地域の皆さまと共に歩む時間として、感謝祭を大切に取り組んでまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

文：ふきのとう向生舎 岩崎



向生舎職員とボランティアさん

○事業所データ

ふきのとう舎

住所：大和市柳橋5-3-1

TEL：046-269-8880

第1ゆりの木ホーム

住所：大和市福田8-22-7

TEL：046-244-6365

ふきのとう向生舎

住所：大和市柳橋5-3-16

TEL：046-268-9912

県央療育センター

住所：大和市柳橋5-2-7

TEL：046-269-0066

カーサ柳橋

住所：大和市柳橋5-2-7

TEL：046-201-0525

輝く利用者さん



かみまで
上檔さん
グランツ遠藤
通所歴 10年

やさしさと気配りで
みんなを支える 上檔さん



バウム作業や受注アクセサリ制作など、さまざまな作業に取り組まれている上檔さん。とても優しく、周囲への気配りや目配りが自然にできる方で、困っている人がいるとすぐに手を差し伸べてくださいます。その姿は、利用者の皆さんや職員からも頼りにされる存在です。特にバウム作業では、作業工程にとても詳しく、新人職員が上檔さんからレクチャーを受けることも多くあります。丁寧に分かりやすい説明に、職員も助けられています。職員が緊張していると、「大丈夫。ゆっくりね。前より上手にできているよ。」と優しい言葉をかけてくださることもあり、その温かい声かけに励まされる場面も多くあります。作業中は、常に一歩先、二歩先の工程を考えながら効率よく取り組み、周囲の様子にも気を配りながら作業を進めてくださっています。また、グランツバウムクーヘンは藤沢市のふるさと納税の返礼品としても取り扱われており、多くの方に親しまれています。これからも上檔さんの優しさで笑顔で、作業場を明るく支えてくださることを楽しみにしています。

■関わっている作業

- ・グランツバウムクーヘン
- ・手づくりキーホルダー
- ・缶バッジ
- ・ストラップ
- ・紙すきはがき

■職員からのひとこと

上檔さんは、いつも周囲を気かけながら作業を進めてくださり、優しい声かけで場の雰囲気をも明るくしてくださいます。上檔さんの笑顔と笑い声のおかげで、バウム室はいつも楽しく温かい空間になっています。これからもその優しさと行動力で、みんなを支えてくださることを楽しみにしています。



明るさとアイデアで
活躍中！ 南さん



南さん
エヌ・クラブ
通所歴 2年

南さんはレトルト作業室において、各種カレーやビーフシチュー、ミートソースなどの製造に取り組んでいます。作業内容は、買い出しから始まり、野菜のカット、炒め作業、カレーやシチューの注入、封入作業など多岐にわたります。1年目は初めての立ち仕事ということもあり、慣れるまでは体力面で不安もありました。しかし2年目となった現在では、体力も少しずつつき、作業のペースをつかみながらさまざまな工程を任されるようになっていきます。また、レトルト食品の製造だけでなく、パンの販売にも積極的に参加しています。近隣地域だけでなく、東京都内で開催される販売会にも参加し、活躍の場を広げています。これからのさらなる成長と活躍が期待される南さん。今後のご活躍がとても楽しみです。

■南さんおすすめ商品

南さんにおすすめ商品を聞くと「全部です！」とのことでした。事業所としては、ビーフカレーとスパイシーポークカレーをおすすめしています。(南さんが持っているのはおすすめのカレーです)

■商品の購入について

レトルト商品 エヌ・クラブ (TEL: 045-250-6470)
県央福祉会が運営する通販サイト
「EVERYDAY STANDARD」からもご購入いただけます。
ぜひお気軽にお問い合わせください。

■職員よりメッセージ

明るく元気で、人懐っこさが魅力の南さん！アイデアマンでもあり、さまざまな商品アイデアを提案してくれるので、私たちも参考にさせてもらっています。これからも周りの方と協力しながら、お仕事を頑張ってください！



杉本さん

ピッコリーナ
通所歴22年

困っている人に手を差し伸べる やさしいシフォンケーキ職人



活動室では、内職作業や自主製品のビーズストラップ製作などを行っています。非常に手際が良く、また間違いがある際にはすぐに見つけてくださるので職員からの信頼が厚いです。併設のカフェでは、週に1回半日の当番に入っています。主に調理に関心が高く、意欲的に参加しています。お店自慢のふわふわシフォンケーキは、杉本さん一人で作ることもあるんです！ハンドミキサーを器用に使って、卵の黄身と薄力粉を混ぜるのはもちろん、白身をふわふわのメレンゲにすることもお手のものです。

■事業所の紹介したい製品

カフェピッコリーナの手作りピザやシフォンケーキ。利用者さんと力を合わせて作っています。

■職員よりメッセージ

いつもシフォンケーキを作ってくれてありがとうございます！杉本さんが作るふわふわシフォンケーキがもっとたくさんの方に知れわたり、手に取っていただく機会が増えていったら嬉しいと思います。



～杉本さんよりメッセージ～

シフォンケーキのほかにも
手作りピザやパスタなど
美味しいメニューがたくさんあります。
ご来店お待ちしております！



包丁さばきはおてのもの！

草刈さん

クレイヨンピピー
通所歴 14年



クレイヨンピピーが設立した2012年から通所してくださっています。鉄道模型好きで、手先が器用です。草刈さんは調理師学校に通学されていた経験もあり、包丁さばきはクレイヨンピピーの中で誰よりも上手です。看板メニューのカレーは1回に1kgの玉ねぎを使って調理するのですが、草刈さんはきれいに手早くみじん切り。付け合わせなどに使うキャベツの千切りもスーパーで売っているカットされたものよりも、とても細くきれいにカットしていただきます。ハンバーグも手作りしていますが、こね方から成型までとても丁寧に調理されています。



■事業所の紹介したい商品

クレイヨンピピーのメニューはすべて手作りしています。開店当初から看板メニューはカレーです。

写真はたくさんの野菜を盛り付けるクレイヨンピピーおすすめのスペシャル野菜カレーです。ご来店お待ちしております！

■職員よりメッセージ

通所開始当時は5分立って作業することがやっとというところから、通所を続けて、通所日数や作業時間数を増やしてきました。自分のできる範囲でこつこつと継続していくという大切な力を持っている草刈さん。これからもクレイヨンピピーと一緒に盛り上げていってください！

2025年度助成金受給

・ふきのとう舎（大和市）

40年以上使用していましたお手洗いです
が、舎内7か所全てのトイレを赤い羽根助成
金を利用させていただき、改修工事を行いま
した。壁紙も全て張替え、トイレ内はとても
明るく快適に使用する事ができました。利
用者さん、職員も気持ちよく使用していま
す。ありがとうございました。



広報委員からのひとこと

今回のレジオン・ヴィヴィは「Canva」というアプ
リを使用して作成しています。各自担当のページをデザ
インして作成しました。以前より経費削減はできた一方
で、慣れていない私はデザイン内容含めてとも苦慮しま
したが、新しいことへの挑戦はとても大きな学びがあり
ました。（小林）

編集ソフトを使用した、広報委員によるDTP（デスク
トップ・パブリッシング）で完成した初の誌面になりま
す。委員は皆、四苦八苦しながらも創意工夫を重ねまし
た。慣れれば慣れるほどデザインも上達すると思いま
す。今後のご期待ください。（青木）

昨年「ひとこと」を書いてから「もう1年経つのか」
と感じます。今号は新たな取り組みとして、委員一人ひ
とりが悪戦苦闘しながら手作業でデザインしたレジオン
ヴィヴィとなっています。これからもより良い広報誌を
目指して取り組んでいきたいと思えます。（安達）

今号は外部への委託はせずに委員のみんなでデザイン
から作成しました。慣れないアプリ、慣れない作業の中
ではございましたがなんとか形になりました。今後のデ
ザイン等はまだ模索中ですので、楽しみにお待ちいただ
けたら幸いです。（守家）

2年目となり至らない委員でしたが、関わりをもっ
ていただいたみなさまのおかげで走り抜けることがで
きました。感謝の気持ちで次年度も挑戦をしたいと思
います！新しい挑戦として委員によるデザインを行いま
した。お楽しみいただければ幸いです。（加藤）

今回からアプリを使用して、初めて広報委員会のメン
バーから作り上げた48号です。不慣れな部分も
あり、みんな苦戦をしたところもありますが、それぞ
れが工夫してきました。今後も本業の業務をこなしま
しながら、皆さんに楽しんでもらえるようにしたいと思
います。（吉田）

なかなか委員会には参加できていませんでしたが、
法人の広報に関わることができて良かったです。今回
分から新しいアプリを使用しアップデートされた広報
誌をぜひ手に取って読んでいただければと思います。
（工藤）

オブザーバーとして参加し、皆さんの熱心な活動に
触れることができました。本業の合間の取材や執筆作
業など、一人ひとりの努力があってこそこの機関紙です。
地道な努力の積み重ねが、この機関紙を形作っていま
す。記事を手取る際は、制作に携わった委員たちの
想いにも心を寄せていただければ幸いです。（鈴木）

編集後記

「21世紀」に入って早くも四半世紀が過ぎました。“2000年問題”が世間を騒がせたのは遠い昔になりました。
次の25年なんて想像もできませんが、せめて次の一年は良い年になればと思う今日この頃です。（安達）

編集委員

ふきのとう舎 小林
法人本部 青木
法人本部 守家

ふきのとう舎
障害者自立生活アシスタント 工藤
安達

緑ヶ丘もえぎ保育園 吉田
ミントハウス 加藤
百合丘就労援助センター 鈴木